松山平野南部における古墳時代後期首長墓の系譜

冨　田　尚　夫

1　はじめに　―近年の首長墓系譜研究の動向―

前方後円墳を中心とした墳墓を以て首長墓とし、その出現・連続性・消長について論じられている首長墓研究は古墳時代の政治史的研究の一部として位置付けられる。近年、各地域で活発に議論が行われ（中国・四国前方後円墳研究会2001）、古墳時代研究で大きな部分を占めている。

一地域における複数の首長墓の系譜関係を復元する首長墓系譜研究は、各地域の首長墓群を分析する形で進められていたが、1980年代に都出比呂志氏によって「前方後円墳など首長層のために築かれた数基の大型の古墳が隣接してグループをなすもの」で、「現在の行政単位の町や小さい市に一グループ程度存在し、個々の古墳はそれぞれ一世代ぐらいの間隔をあけながら代をかさねて築かれる。この首長墓群の一単位を首長墓系譜」と呼ぶ（都出1988）と明確に定義された。そして、1999年には首長系譜の変動パターン（継続と断絶）を地域毎に比較することにより、列島規模での政治史的位置付けを試みている（都出1999）。

このように近年の首長墓系譜研究では、各小地域での動向の把握から地域間の比較、更にはより広域な比較検討へと向かいつつある（都出1999・松木2000）。

一方、愛媛県における首長墓系譜研究は、小地域での動向が集積されつつあるが（岡田2000・2001・山内2001b）、「首長墓系譜」を実証的に検証された事例は数少ないのが現状である。そこで本稿では、小地域間の比較検討を行う前提として、松山平野南部という小地域における首長墓の系譜を実証的に復元することができるかどうかを検討することとしたい。

2　首長墓の認定と首長墓系譜の復元

(1) 首長墓の認定

地域における首長墓系譜研究で大きな部分を占めるのは、「首長墓の認定」作業と「系譜の復元」作業である。

従来の研究では、他の古墳よりも墳形や規模などに卓越性が認められる古墳について「首長墓」という用語が用いられている。都出氏も「首長層のために築かれた数基の大型の古墳」として「首長墓」という用語を使用している（都出1988）。松山平野では、前方後円墳が10数基確認されているが、墳形のみによって「首長墓」と認定することは難しく、「首長墓」[(1)]とそれ以外の古墳を明確に区分できない。それ故、今一度「首長墓」という用語を用いるにあたって、条件を設定する必要がある。「首長墓」と認定するにあたっての条件として、次の３点を提示したい。

① 単独墳である。

② 墳形・規模・内部主体に卓越性が認められる。

③ 副葬遺物に卓越性が認められる。

なお、これらの条件を設定するにあたっては、「卓越性」の基準は畿内などの中央に求めるのではなく、河川流域や平野、旧郡といった一定の地域内に基準を求めるものとする。

(2) 首長墓系譜の復元

首長墓系譜研究でのもう一つの基礎的作業として、「首長墓系譜」の復元作業がある。先行研究では古墳の分布と内容把握・所属時期に関する正確な情報が必要であり、かつ首長が依拠した生活圏の重要性が指摘されている（都出1999)。

今回の作業にあたっては、まず、生活圏として設定することができる一定の範囲内に分布する古墳を対象とする。なお、生活圏として設定する際には「居住の場」としての集落遺跡も確認されていることが望ましいが、現在のところ、集落遺跡と古墳の関係を一定地域内で論じることができる事例は松山平野では数少ない。次に、各古墳の墳形・内部主体・副葬遺物などの諸要素を比較し、関連・系譜といったものが存在するかどうかを検証する。これまでの研究では、対象地域での資料上の制約から、発掘調査が行われていない首長墓を用いて「系譜」関係が論じられることが多い。しかし、発掘調査が行われ、墳形や規模、内部主体、副葬遺物などが明らかとなっている首長墓を要素毎に比較すれば、この「系譜」関係の有無とその実態を明確にすることができると考える。

以上のことから、本稿では、次の方法によって首長墓系譜を検討する。

① 特定地域に分布する古墳を対象とする。

② 地域内の古墳の墳形・外部構造・内部主体・副葬遺物を要素毎に比較する。

③ 上記の要素の中から首長墓と認定することができるかを検討する。

④ 首長墓と認定した古墳の相対的年代関係を整理し、「系譜」を検証する。

3 松山平野の後期首長墓の分布

今回検討の対象とする松山平野は愛媛県の中央部に位置し、西は伊予灘・斎灘に面し、南東部は石鎚山系、北部は高縄山塊に挟まれた東西約20km、南北約17kmの細長い三角状の沖積平野である。平野のほぼ中央に西から重信川が流れ、その支流の石手川、小野川、砥部川といった河川水系により地域区分が可能である。古墳の分布もこの水系を単位とした地域区分によって把握されることが多い。[(2)] 本稿では図１に示すように石手川以北を北部、石手川と重信川に挟まれた地域を東部、重信川以南を南部として区分する。

さて、当平野では、中期後半から後期の前方後円墳が11基確認されている。四国では後期の前方後円墳は16基確認されており、その大半が松山平野に集中している。[(3)] ここでは先の地域区分に基づき、後期前方後円墳と終末期方墳を概観することとしたい。

(1) 松山平野北部

①永塚古墳（松山市史料集編集委員会1987・栗田1987)

松山市衣山２丁目に所在し、規模は全長推定約40m、後円部径約20m、前方部幅約21mを測る。戦時中より後円部及び主体部の破壊が進み、宅地化に伴い発掘調査が行われたが、石室の基底部のみが確認されている。石室の形態などは不明である。円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土しており、６世紀後半に位置付けられる。前後の時期に位置付けられる古墳は確認されていない。

②塚本１号墳（栗田1991)

松山市福角町の丘陵端部に所在する方墳である。1985年に開発に伴い発掘調査が行なわれ、周溝の一部が確認され、規模は一辺17～18mと推定されている。横穴式石室１基が確認され、石室

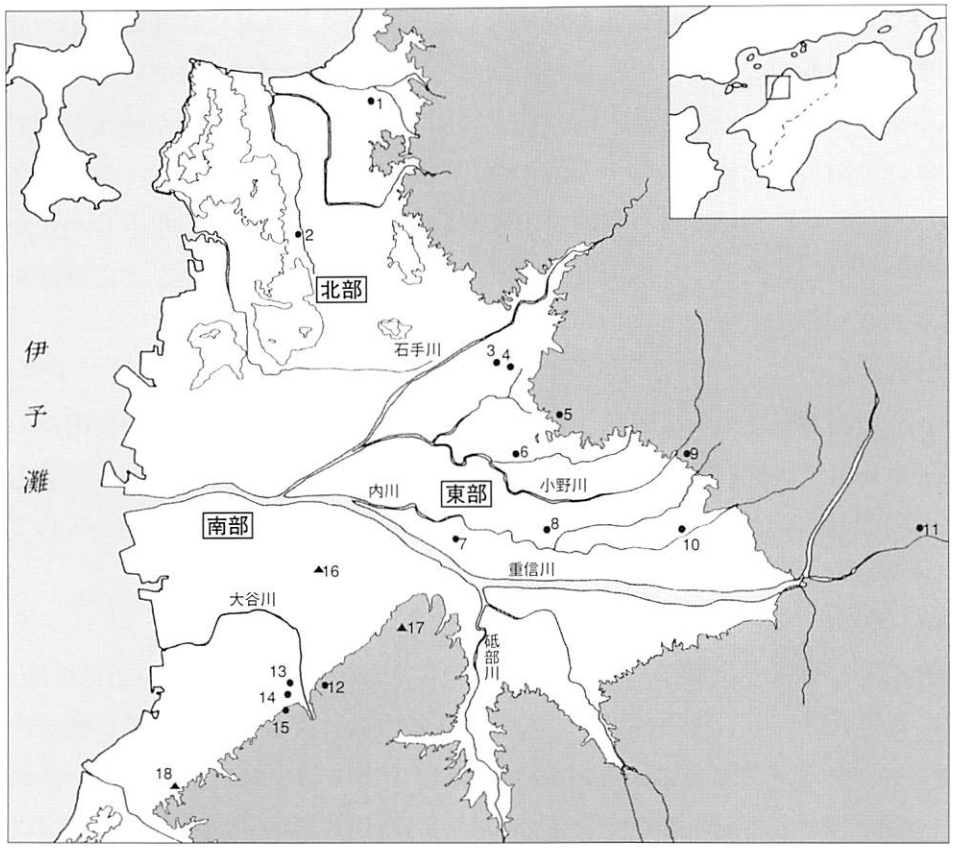

図１　松山平野後期首長墓及び関連遺跡位置図（縮尺１/200,000）

内から圭頭大刀・鉄刀・挂甲小札・鉄鏃・刀子・鉄斧・耳環・ガラス玉・須恵器などが出土している。墳丘は小規模であるが、圭頭大刀や挂甲小札が副葬されていることから終末期の首長墓として捉えることができる。築造時期はTK209型式並行と考える。

当地域では、対象古墳が２基のみで、古墳間の関連を検討するのは困難である。塚本１号墳出土圭頭大刀は、後述する上三谷１号墳出土資料と共通し、終末期方墳を比較する上で重要な副葬遺物の一つである。

（2）松山平野東部

①経石山古墳（森1986・田城・大森1992・河野1997）

松山市桑原町に所在し、規模は全長56m、後円部径29m、前方部幅20mを測る。1990年と1994年に後円部東側の周溝の一部が確認されている。古墳の築造時期を示す遺物は確認されていない。

②三島神社古墳（長井・森1972・山内2001a）

松山市畑寺町に所在した全長45m、後円部径20m、前方部幅20mを測る前方後円墳である。1971年に開発に伴い発掘調査が実施された。その結果、後円部にて「畿内型」の横穴式石室が確認され、石室内からは装身具・金銅装馬具破片・須恵器などが出土している。また、墳丘部（前方部裾）では埴輪列が確認されている。築造時期は出土須恵器からTK47～MT15型式並行に位置付けられる。当墳は「畿内型」の横穴式石室の伝播や前方後円墳での横穴式石室の採用を考える上で、松山平野では重要な位置を占める古墳である。

③播磨塚天神山古墳（吉岡2001）

松山市南梅本町に所在し、規模は全長32.5m、後円部径23m、前方部幅21mを測る。1999年に

開発に伴い発掘調査が行われ、墳丘部では埴輪が大量に出土し、東側くびれ部では埴輪列が一部残存していた。また、前方部西側面では盾・家・蓋・人物などの形象埴輪が出土している。主体部は、後円部で横穴式石室１基が、後円部と前方部の接合部にて小竪穴式石室１基が確認されている。横穴式石室からは、金銅製刀子飾り金具・刀子・馬具（辻金具・心葉形杏葉）・鉄鏃・装身具が確認されている。築造時期については石室内の須恵器破片と墳丘部の埴輪の組み合わせから６世紀初頭～前半とされている。当墳は後期前方後円墳の埴輪祭祀や埴輪の編年などを検討する上で重要な情報を提示するものである。

④桧山峠７号墳（栗田1997）

松山市平井町に所在し、発掘調査によって確認された前方後円墳で、直径17m前後の後円部のみ確認されている。内部主体は竪穴式石室で轡・刀子・鉄鏃・ガラス小玉が出土している。築造時期はくびれ部と主体部攪乱坑出土須恵器（TK47型式並行）から５世紀後半～末と考えられている。

⑤葉佐池古墳（栗田1995・1998）

松山市北梅本町に所在し、規模は全長推定約60m、後円部径35mを測る。1992年の発見以降、２次にわたる発掘調査が行われている。その結果、主体部は３基の横穴式石室と２基の小竪穴式石室が確認された。２基の横穴式石室の調査では１号石室は墳丘中央部で確認され、鹿角装鉄器・鉄鏃・鉄斧・刀子・須恵器が未盗掘のままで発見された。２号石室は後円部中央で確認され、馬具・鉄鏃・鉄製品・須恵器が出土している。規模と位置から当墳の中心主体部と考えられえる。造営時期は、６世紀中頃とされている。当墳は、残存状況が良く、詳細な調査が実施されたことから、今後の後期古墳研究で重要な位置を占めると思われる。

⑥二ツ塚古墳（二つ塚古墳調査会1984・森1986）

松山市北久米町に所在した全長推定約48m、後円部径約30m、前方部幅約28mを測る前方後円墳である。後円部のみが残存し、詳細は不明であるが、明治期の記録から、横穴式石室の存在が想定されている。

⑦波賀部神社古墳（長井・森1992）

松山市高井町に所在し、規模は全長62m、後円部径28m、前方部幅28mを測る。1881年に遺物が発見され、耳環・鉄製品・須恵器などが出土している。耳環と須恵器が現存しているが、須恵器からは５世紀後半以降の築造と考えられる（冨田2003）。

⑧白山神社古墳（松山市史料集編集委員会1987）

松山市井門町に所在し、規模は全長約24m、後円部径17m、前方部幅15mを測る。測量調査のみが実施され、内部主体などについては不明である。

⑨川上神社古墳（西田1986・野口・岡野1986・名本2000）

川内町南方に所在し、長辺約40m、短辺約20mの方墳である。２基の横穴式石室が確認されており、東側の石室から金銅装馬具・鉄製冑・鉄刀・鉄剣・鉄鏃・須恵器などが出土している。出土した須恵器から築造時期はTK209型式並行と考える。

以上のように当地域では墳形のみが確認されているもの（経石山古墳・白山神社古墳）、明治期に遺物が出土し、詳細な情報が残存しないもの（二ツ塚古墳・波賀部神社古墳）、発掘調査が実施されたもの（三島神社古墳・播磨塚天神山古墳・葉佐池古墳・桧山峠７号墳）、発掘調査以

外で遺物が発見され出土状況などが不明なもの（川上神社古墳）があり、判明している情報は一様ではない。平野内で比較する際には、首長墓が当地域に集中していることは指摘できるが、詳細な比較検討は難しい。

（3）松山平野南部

①猿ヶ谷２号墳（多田・和田・岡本1998）

伊予市上三谷に所在し、全長39m、後円部径25mの前方後円墳である。[(4)] 1993年に道路建設に伴い発掘調査が行われている。内部主体は横穴式石室１基と箱式石棺１基が確認されている。横穴式石室からは、金銅装馬具・鉄剣・鉄刀・鉄鏃・鉄斧・刀子・耳環・装身具・須恵器が出土している。

②客池古墳（相田1970）

伊予市上三谷に所在し、全長30m、後円部径17m、前方部幅12mを測る。墳丘測量調査のみ実施されており、主体部などについては不明である。

③上三谷古墳群（１号墳・２号墳・３号墳）（谷若編1987・1988）

伊予市上三谷の標高約27mから約36mの扇状地上で８基の古墳が確認されている。墳形が明確にされているのは４号墳（円墳）、１号墳・２号墳・８号墳（方墳）の４基である。３号墳は前方部が確認されていないが、周溝のくびれ部の一部が確認されており、前方後円墳として取り扱うこととする。なお、各古墳の詳細については次章で紹介することとし、ここでは省略する。

当地域では、２基の前方後円墳と２基の方墳で主体部・副葬遺物が判明している。また、他地域に比べると近接した地域に集中して分布している。

以上のように松山平野に分布する後期首長墓墳を概観したが、東部地域に集中して前方後円墳が認められること、南部において特定地域に前方後円墳・方墳が集中していることが明確になった。

そこで次章では、発掘調査が行われた首長墓が集中している松山平野南部を対象として首長墓間の系譜について検討する。

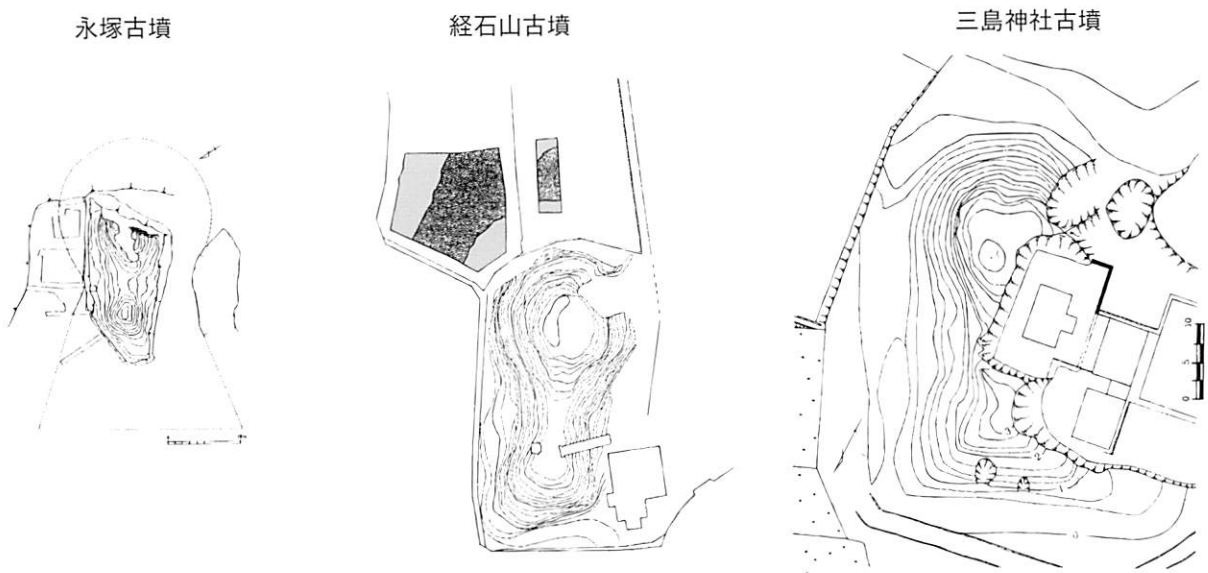

図２　松山平野後期首長墓墳丘図集成－１（縮尺1/1,000）

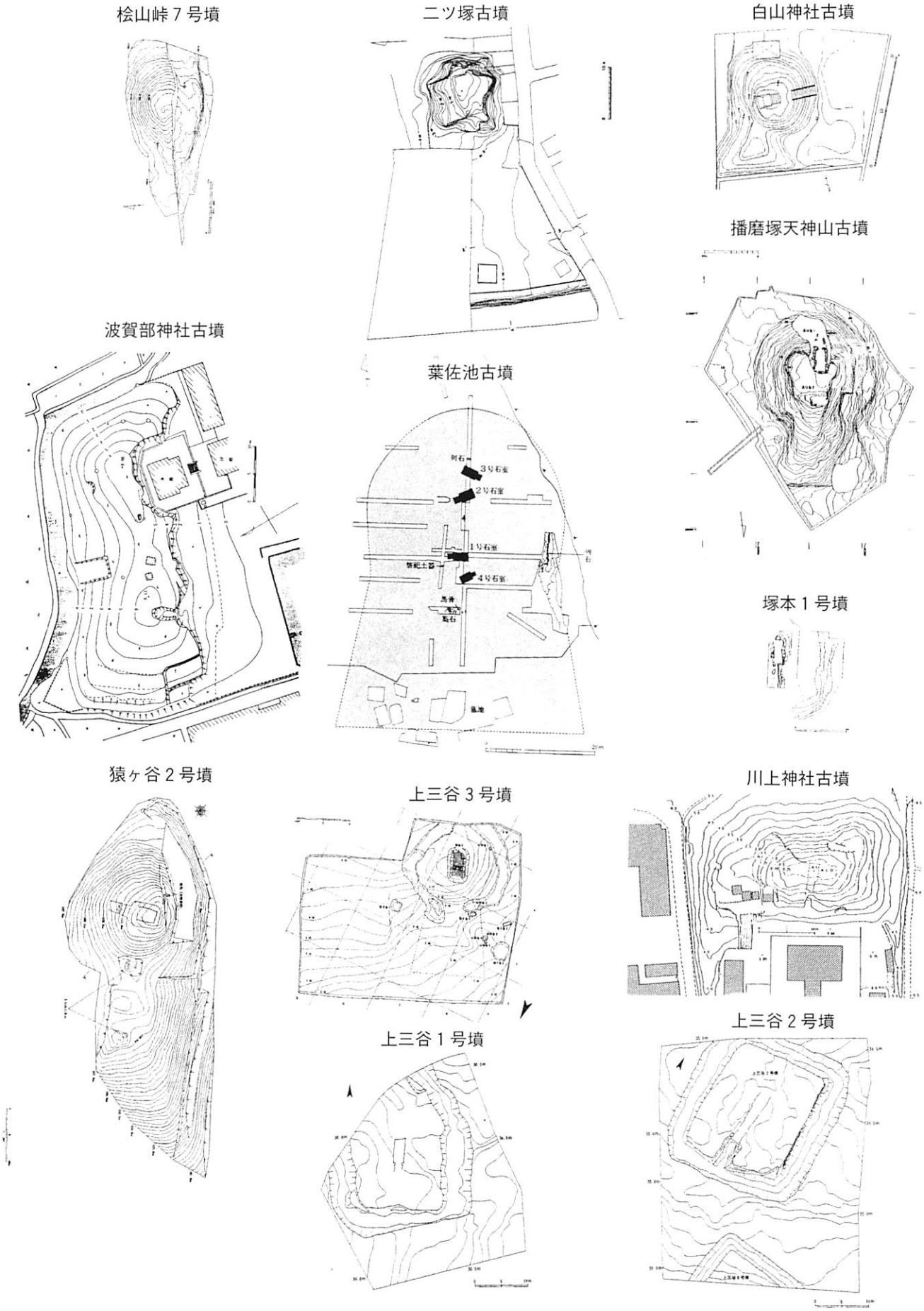

図３　松山平野後期首長墓墳丘図集成－２（縮尺1/1,000）

4　松山平野南部の後期首長墓の系譜

(1) 対象古墳について

松山平野南部、特に伊予市周辺で発掘調査が実施された後期古墳は上三谷地区の径約1kmの範囲内に10基が集中している（表1伊予市上三谷地区対象古墳一覧参照)。また、出土した須恵器などによってその変遷を追うことができる古墳群である。立地は大きく丘陵尾根上の標高約110m付近のもの（「丘陵上の古墳」）と、扇状地上の標高約35m付近のもの（「平野部の古墳」）に分かれ、上三谷古墳群と猿ヶ谷2号墳・上三谷原古墳との比高差は約70mを測る。

表1　伊予市上三谷地区対象古墳一覧

	古墳名	墳形	規模(m)	主体部	石室規模				主軸方向	副葬遺物	初葬時期	調査年	文献
					石室全長(m)	玄室長(m)	奥壁幅(m)	玄室面積(m²)					
1	上三谷1号墳	方	28.8×21.7	横穴式石室	6.05	4.5	2.1	8.22	N-4°-E	〔玄室〕耳環・倣製神獣鏡・圭頭大刀・須恵器・鉄鏃・玉類 〔羨道〕須恵器 〔周溝〕須恵器（一部玄室内出土遺物と接合）	TK209	1986年	谷若編1988
2	上三谷2号墳	方	30×28	横穴式石室	11.7	7	[2.3]	13.66	N-4°-E	〔石室内〕須恵器・土師器・刀装具・辻金具・飾り金具・耳環・玉類 〔周溝〕須恵器	TK209	1986年	谷若編1988
3	上三谷3号墳	前方後円	30	横穴式石室		4.5	2.05	8.31	N-21°-W	〔玄室〕耳環・須恵器・刀子・鉄鏃・土師器・鉄斧・玉類・鉄鎌 〔羨道〕須恵器 〔周溝〕須恵器 〔1号土坑〕須恵器大甕ほか	TK43	1985年	谷若編1987
4	上三谷4号墳	円	20	横穴式石室		4.4	2	8.88	N-12°-W	〔玄室〕玉類・須恵器・留金具・鞘尾金具 〔周溝〕須恵器（一部玄室内出土遺物と接合）・耳環	TK43	1985年	谷若編1987
5	上三谷5号墳	円？	不明	横穴式石室		[2.5]			N-14°-W	〔玄室〕須恵器・土師器・直刀・鉄斧・鉄鏃・玉類	TK43	1985年	谷若編1987
6	上三谷6号墳	円？	16	横穴式石室						〔玄室〕鉄斧・不明鉄器		1985年	谷若編1987
7	上三谷7号墳	円？	不明	不明								1985年	谷若編1987
8	上三谷8号墳	方	20	不明						須恵器・土師器・弥生土器		1986年	谷若編1988
9	猿ヶ谷2号墳	前方後円	39	横穴式石室		3.5	2.1	8.32	N-18°-W	〔玄室〕須恵器・耳環・玉類・指輪・大刀・鉄鏃・刀子・鉄斧・鉄鎌・轡・辻金具 〔封土内〕須恵器・陶質土器・円筒埴輪・紡錘車	TK10	1993年	多田・和田・岡本1998
10	上三谷原古墳	円	15～18	横穴式石室	4.8	3.5	2	6.33	N-25°-W	〔玄室〕須恵器・耳環・玉類・U字形鍬先・鉄鏃・刀子・鉄斧・直刀・轡	TK10	1993年	多田・和田1998
11	客池古墳	前方後円	30	横穴式石室						〔表採〕円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器		未調査	和田1970

①上三谷1号墳（谷若編1988）

大谷川によって形成された扇状地に位置し、標高は約36mを測る。発掘調査の結果、周溝を有する長辺28.8m以上×短辺21.7mの長方墳で、墳丘中央に南に開口する横穴式石室を有することがわかった。石室の規模は全長6.05m、玄室長4.5m、奥壁幅2.1mを測る。構造は玄室内奥に境石を有し、奥壁前面部分を埋葬空間として意識した構造となっている。副葬遺物は、倣製四神四獣鏡・圭頭大刀・耳環・玉類・須恵器がある。なお、周溝内から装飾付須恵器2点が出土している。

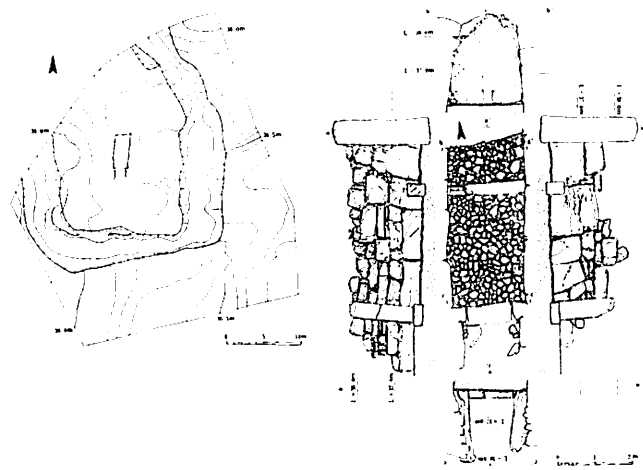

図4　上三谷1号墳　墳丘・内部主体（谷若編1988より）

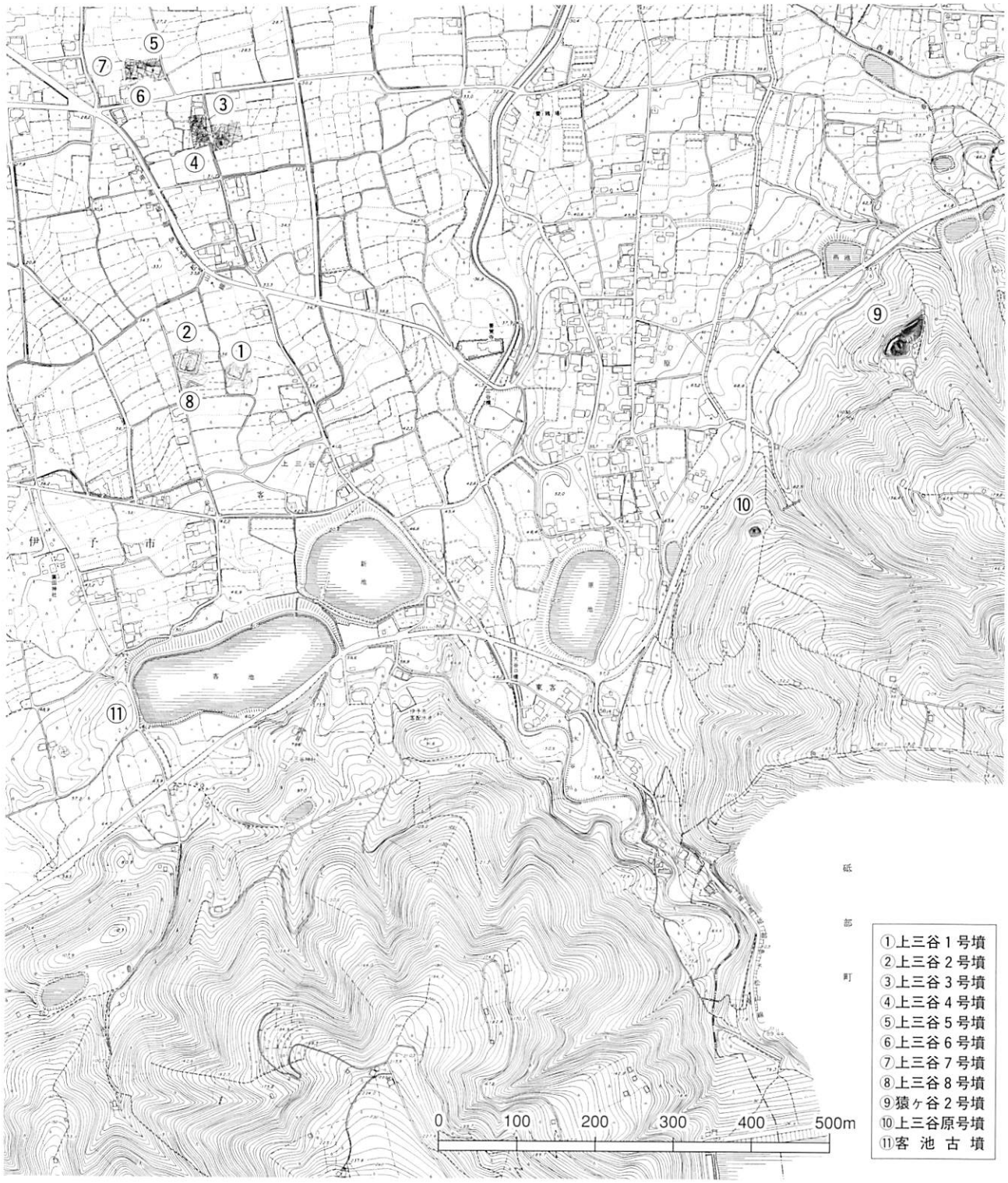

図5　伊予市上三谷地区　古墳位置図

②上三谷２号墳（谷若編1988）

１号墳と同様に扇状地に位置し、標高は約35.5mを測る。１号墳の西約60mに位置し、周溝はすべて確認されていないが、長辺30.0m以上×短辺28.0mの長方墳で、墳丘中央で南に開口する横穴式石室が確認されている。石室は前室を有する複室構造で、玄室奥に１号墳と同様に境石を設けている。規模は全長11.7m以上、玄室長4.2m、前室長2.8mを測り、県内でも大規模な石室である。副葬遺物には刀装具・馬具装具・耳環・玉類・須恵器がある。装飾付須恵器が石室内から出土している。

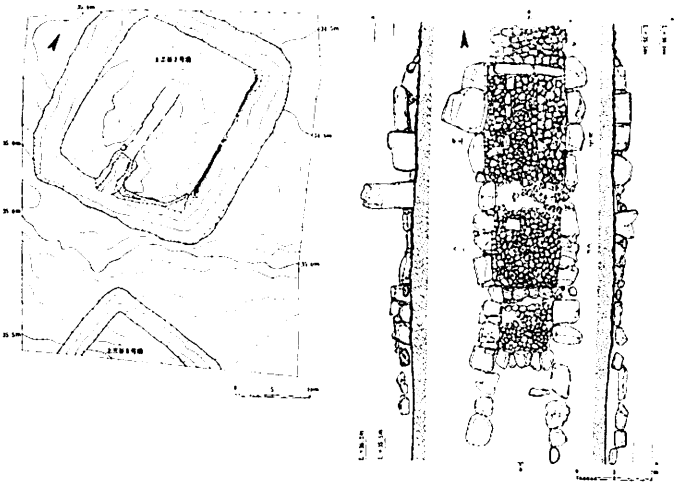

図６　上三谷２号墳　墳丘・内部主体（谷若編1988より）

③上三谷３号墳（谷若編1987）

１号墳・２号墳と同様に扇状地に位置し、標高約30mを測る。１号墳の北約300mに位置する。全長推定約30m、後円部径15mの前方後円墳である。[5] 後円部にて南に開口する横穴式石室１基が確認されている。削平のため、基底部の一部しか残存していないが、規模は玄室長4.5m、奥壁幅2.05mを測る。奥壁より約1.5m手前の部分に大きめの円礫が小口積みされて、境石状になっている。１・２号墳と同様に奥壁前面を埋葬空間として意識していると考えられる。石室内からは鉄鏃・鉄鎌・鉄斧・刀子・耳環・装身具・須恵器が出土している。また、東側周溝の東約７mの所で2.4m×2.1mの楕円形の土坑が確認され、須恵器大甕・坏・高坏・長頸壺など計９点の須恵器が出土している。大甕を用いた祭祀が行なわれたことが想定できる。

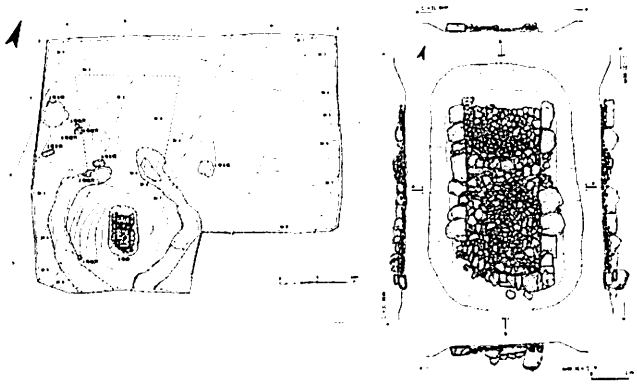

図７　上三谷３号墳　墳丘・内部主体（谷若編1987より）

④上三谷４号墳（谷若編1987）

同じく扇状地上に立地し、標高約29mである。３号墳の西約30mに位置する。周溝の一部が検出され、径約20mの円墳と考えられる。墳丘のほぼ中央部にて南に開口する横穴式石室１基が確認されている。基底部が残存していない部分もあるが、石材の抜き取り痕などから玄室長約4.4m、奥壁幅2.0mの規模が想定できる。石室内からは、留金具・玉類・須恵器な

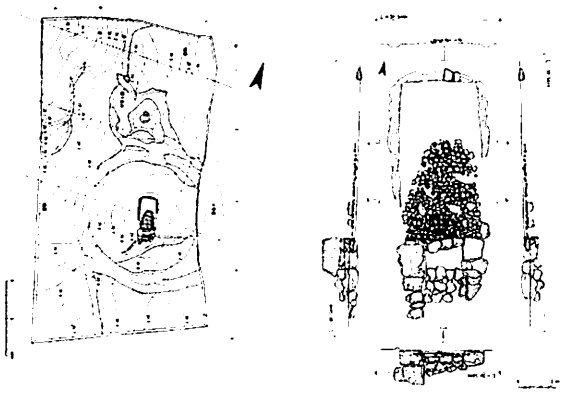

図８　上三谷４号墳　墳丘・内部主体（谷若編1987より）

どが出土している。また、周溝では、北側と南側の２箇所に集中して須恵器が出土している。南側の一群は石室内から運び出されたもの、北側の一群は墓前祭祀に伴うものと考えられている。

⑤上三谷５号墳（谷若編1987）

扇状地上に立地し、標高は約27mである。４号墳の北西約90mに位置する。周溝が検出されていないことから、墳形・規模は不明である。南に開口する横穴式石室の基底石と床石の一部が確認されている。規模は玄室残存長2.5m、最大幅2.05mである。石室内から直刀・鉄鏃・鉄斧・玉類・須恵器が出土している。

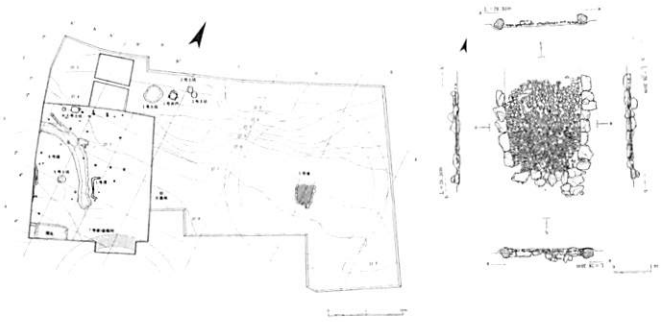

図９　上三谷５号墳　墳丘・内部主体（谷若編1987より）

⑥上三谷６号墳（谷若編1987）

扇状地上に立地し、標高は約27mである。5号墳の西約30mに位置する。周溝の約1/4が確認され、径約16mの円墳と考えられる。横穴式石室の一部が確認されているが、調査区外のため、石室の規模などは不明である。石室内から鉄斧と鉄器片が出土している。

⑦上三谷７号墳（谷若編1987）

扇状地上に立地し、標高は約27mで、６号墳の南東約15mに位置する。円筒埴輪片が帯状に確認されているのみであり、墳形・規模・主体部などは全て不明である。

⑧上三谷８号墳（谷若編1988）

扇状地上に立地し、標高は約35mで、２号墳の南約７mに位置する。周溝の一部のみが確認されている。規模は不確定であるが、一辺20m前後の方墳と想定されている。内部主体は確認されていない。周溝内から須恵器が出土している。

⑨猿ヶ谷２号墳（多田・和田・岡本1998）

行道山の北麓の北西に伸びる丘陵上に位置し、標高は最頂部で約110mを測る。全長39mの前方後円墳で、南に開口する横穴式石室を有する。石室の規模は玄室長3.5m、奥壁幅2.1mである。玄室内には全面に敷石が認められるが、奥壁より約1.3m手前の範囲には玉砂利状の礫が敷き詰められ、奥壁前面を埋葬空間として意識されていることがわかる。

副葬遺物には、金銅装ｆ字形鏡板付轡１・素環鏡板付轡２・金銅装大刀・鐔を有する大刀など、他の古墳より卓越性を示す遺物が多くあることが特徴である。

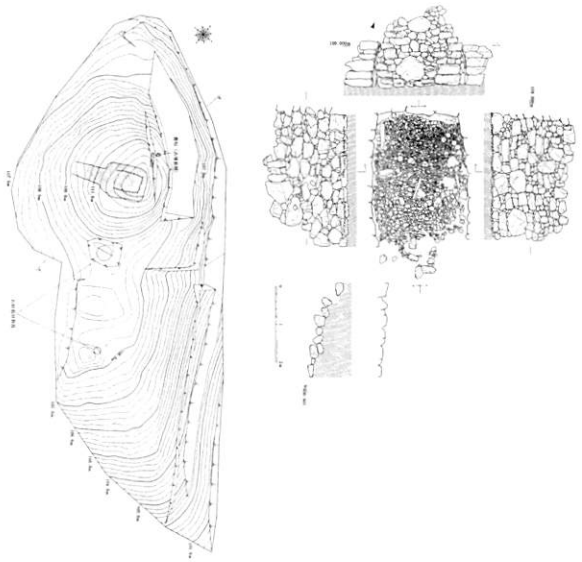

図10　猿ヶ谷２号墳　墳丘・内部主体（多田・和田・岡本1998より）

⑩上三谷原古墳（多田・和田1998）

丘陵尾根上に立地し、標高は約109mで

ある。猿ヶ谷２号墳の南西約300mに位置する。削平のため、規模は明確ではないが、径15～18mの円墳で墳丘中央に南に開口する横穴式石室が確認されている。石室の規模は、全長4.8m、玄室長3.5m、奥壁幅2.0mである。玄門部に段を有する構造となっている。玄室内には敷石が認められ、奥壁の前面部分は削平のため、一部しか残存していないが、やや小さい円礫が用いられており、埋葬空間として意識されていることがうかがえる。

副葬遺物には、素環鏡板付轡・馬具金具・U字形鍬先・鉄斧・刀子・鉄刀・鉄鏃・玉類・耳環・須恵器などがある。

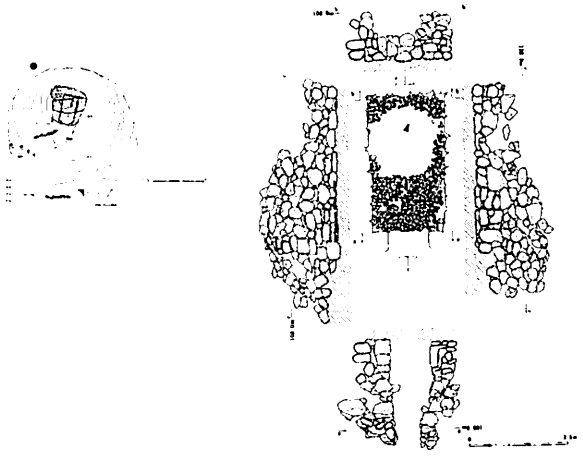

図11　上三谷原古墳　墳丘・内部主体
（多田・和田1998より）

(2) 首長墓の認定

次に先に示した10基の古墳について、首長墓として認定することができるかを検討したい。墳形・規模・内部構造が不明である上三谷５号墳・上三谷６号墳・上三谷７号墳・上三谷８号墳については、検討から除外する。そこで上三谷１号墳・上三谷２号墳・上三谷３号墳・上三谷４号墳・猿ヶ谷２号墳・上三谷原古墳の６基の古墳を対象として検討する。

①墳形の卓越性について

墳形では、後期・終末期においては前方後円墳と方墳に卓越性を認めることができる。それ故、前方後円墳である上三谷３号墳と猿ヶ谷２号墳、方墳である上三谷１号墳と上三谷２号墳の４基は、首長墓の条件の一つを備えていると考える。上三谷４号墳と上三谷原古墳は円墳であり、この要素を欠落する。

②墳丘規模の卓越性について

上三谷３号墳と猿ヶ谷２号墳の全長はそれぞれ30m、39mで前方後円墳としては小型である。上三谷１号墳と上三谷２号墳は方墳で一辺約30m前後であり、卓越性を認めることができる。上三谷４号墳と上三谷原古墳は径20m前後であり、卓越性は認めることができない。

③内部主体の卓越性について

ここでは、松山平野の横穴式石室の規模を基にした度数分布により、その卓越性を検討する（図12参照）。石室全長では、上三谷１号墳（6.05m）と上三谷２号墳（11.7m）は、松山平野内で大規模なものに含まれる。上三谷原古墳（4.8m）は中規模の範囲に当る。玄室長では、４m以上である上三谷１号墳（4.5m）・上三谷２号墳（7m）・上三谷３号墳（4.5m）・上三谷４号墳（4.4m）は大規模なものに位置付けることができる。猿ヶ谷２号墳（3.5m）と上三谷原古墳（3.5m）は中規模であり、平均値2.78m[(6)]より大きなものである。以上の石室規模の比較からは、上三谷１号墳・上三谷２号墳・上三谷３号墳・上三谷４号墳・猿ヶ谷２号墳・上三谷原古墳の６基全ての古墳に卓越性を認めることが可能である。

④副葬遺物の卓越性について

副葬遺物の中で卓越性を示すものとしては、金銅装馬具・装飾付大刀・鏡・装飾付須恵器など

を挙げることができる。[7] これらの遺物を副葬した古墳としては、上三谷１号墳（倣製鏡・圭頭大刀・装飾付須恵器）、上三谷２号墳（装飾付須恵器）、猿ヶ谷２号墳（金銅装ｆ字形鏡板付轡・金銅装大刀など）の３基の古墳について卓越性を認めることができる。

以上の墳丘・規模・内部主体・副葬遺物の卓越性の検討から首長墓と認定することができる古墳は、上三谷１号墳・上三谷２号墳・上三谷３号墳・猿ヶ谷２号墳の４基としておきたい。

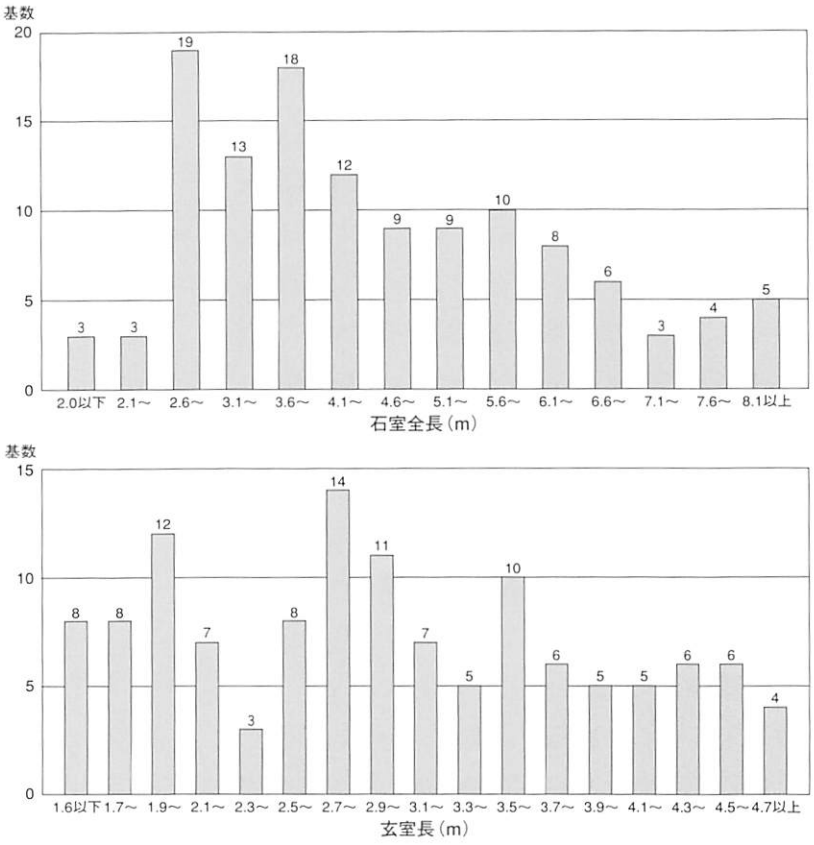

図12　松山平野石室規模度数分布（遺跡発行会1998aを基に作成）

表２　対象古墳の卓越性について

古　墳　名	墳　形	規　模	内　部 主　体	副　葬 遺　物	首長墓 の認定
上三谷１号墳	○	○	○	○	○
上三谷２号墳	○	○	○	○	○
上三谷３号墳	○	○	○	×	○
上三谷４号墳	×	×	○	×	×
猿ヶ谷２号墳	○	○	○	○	○
上三谷原古墳	×	×	○	×	×

（3）築造時期及び埋葬回数の検討

次にこれら４基の首長墓の築造時期・造営時期を出土した須恵器[8]を基に検討する[9]とともに、各古墳での埋葬回数について検討する。

①上三谷１号墳

遺物は石室内と周溝から出土しており、周溝内出土遺物と石室内出土遺物の接合があることから、石室内から遺物の二次的移動が確認できる。石室内では、境石より奥壁側では耳環・倣製鏡・圭頭大刀がほぼ埋葬時の様子を留めて出土しているが、須恵器は出土していない。境石の手前では短頸壺と坏蓋がそれぞれ２箇所に破片が集中して出土している。石室のほぼ中央では、人骨Ａ・Ｂとそれに伴い須恵器高坏蓋と坏身がある。玄門部西側では長頸壺と坏蓋が完形で出土している。羨道部では、框石の前と、西側壁寄りの２箇所で坏身が出土し、框石前から出土した高坏は玄門西側出土のものと接合している。このように石室内で最終埋葬時の原位置を保つと考え

られる須恵器は、人骨Aに伴う坏身（5）、人骨Bに伴う高坏蓋（4）・坏蓋（1）、玄門西側の長頸壺（12）と坏蓋（2）、羨道部の坏身（7・6）と非常に少ない。また、長頸壺（12）と坏蓋（2）には型式差が認められることから、一括性はない。

周溝内からは多くが破片で出土し、大甕のように墳丘祭祀に伴うものがあることから、「墳丘祭祀遺物と石室内副葬遺物が混在している」と判断されている（谷若編1988）。

以上の出土状況からは、石室内では須恵器の二次的移動が行われ、初葬時の須恵器は原位置を保っていないことが明らかである。その為、石室・周溝出土資料から最古型式の須恵器を抽出し、築造時期とする。最古型式のものは周溝出土無蓋高坏(49)で、TK209型式並行と捉えることができる。その後副葬された須恵器は、TK217型式・TK46型式・TK48型式並行のものがあり、最も多いのはTK209～TK217型式並行のもので、最新のものはTK48型式並行の長頸壺（12）である。なお、圭頭大刀は、瀧瀬芳之氏の分類（瀧瀬1986）で有窓鐔二足佩用圭頭のⅣ式に近いものであり[10]、TK43型式に並行し6世紀後半を上限とする時期比定が可能である。埋葬回数は、奥壁前面での埋葬と人骨2体の確認から3回以上を想定することができる。

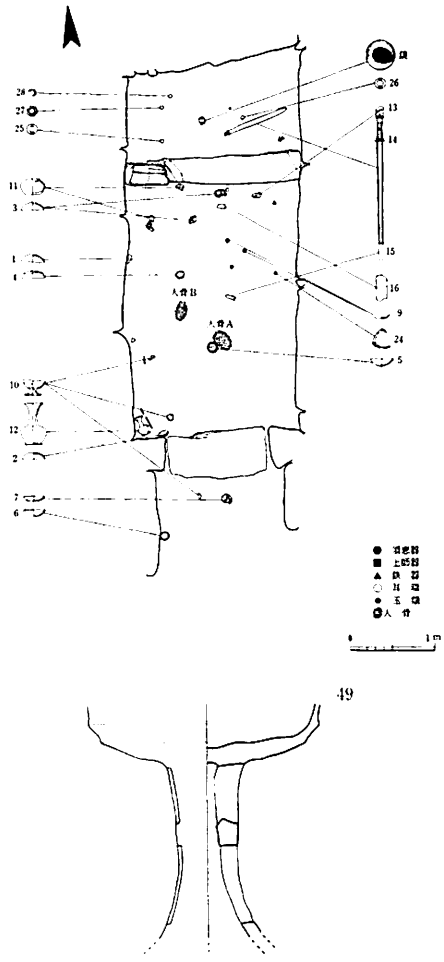

図13　上三谷1号墳石室内遺物出土状況図及び最古相の須恵器（谷若編1988より）

②上三谷2号墳

玄室・前室・羨道・周溝から遺物が出土している。玄室では境石より奥側で耳環と空玉・勾玉・管玉・丸玉・小玉が出土している。なお、この境石は石室築造当初より構築されていることから、これらの遺物に伴う被葬者がこの古墳の初葬者と想定できる。境石より手前では東側棺床で人骨Cと管玉・丸玉が出土している。西側棺床では、管玉・丸玉が出土し、棺床の手前で人骨Bが確認されている。なお、この2つの棺床の間で須恵器高坏（100）が出土しているが、前室出土資料と接合することから、二次的移動を受けていると思われる。

前室では西側壁沿いに棺台があり、その上から人骨Aが確認され、土師器椀を伴っている。東側壁周辺では坏蓋・坏身・高坏・広口壺・長頸壺・短頸壺・平瓶・小型直口壺・椀・装飾付広口壺・器台などの多数の須恵器が集積された状態で出土している。須恵器に型式差が認められ

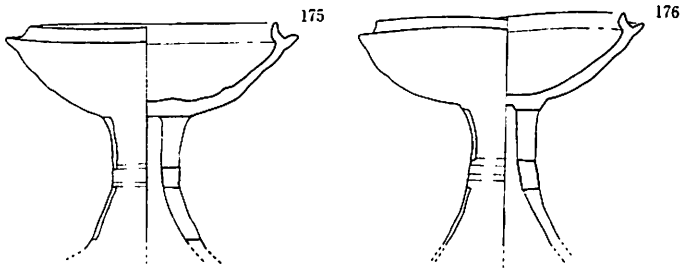

図14　上三谷2号墳最古相の須恵器（谷若編1988より）

ることから、二次的移動に伴い集積されたものと考えられる。

羨道では、馬具の留金具と刀装具の一部が出土している。

周溝では、南西隅にて坏蓋・坏身・高坏・広口壺・大甕が出土している。前庭部にて長頸壺が出土している。周溝出土須恵器は、石室内から持ち出されたものと墳丘祭祀に用いられたものがあると想定される。

このような出土状況から、埋葬時の原位置を保つ須恵器はなく、石室・周溝出土須恵器の中で最古型式のものから築造時期を想定する。該当資料は周溝出土有蓋高坏（175・176）でTK209型式並行と捉えることができる。最新型式のものは、蓋（93）で、TK217型式並行と捉える。このように出土した須恵器からは短期間の埋葬が想定される。埋葬回数は、奥壁手前の埋葬と人骨3体の確認から4回以上の埋葬が想定できる。

③上三谷3号墳

玄室・羨道・周溝から遺物が出土している。石室内では境石より奥側で耳環が出土している。境石付近では第1次敷石上から坏蓋・無蓋高坏の破片が出土している。境石直上からは、刀子・鉄鏃・平瓶が出土している。境石より玄門側では、東側玄門付近にて坏蓋・高坏・平瓶などが集中して出土している。また、若干離れた所で脚付広口壺・高坏・平瓶の破片が出土している。

羨道では、小型直口壺が出土している。

周溝では、埋土から坏身・短頸壺が出土している。

これらの状況から破片ではあるが、境石周辺の第1次敷石直上の坏蓋（1）・無蓋高坏（3・4・9）が石室内の層序的に一

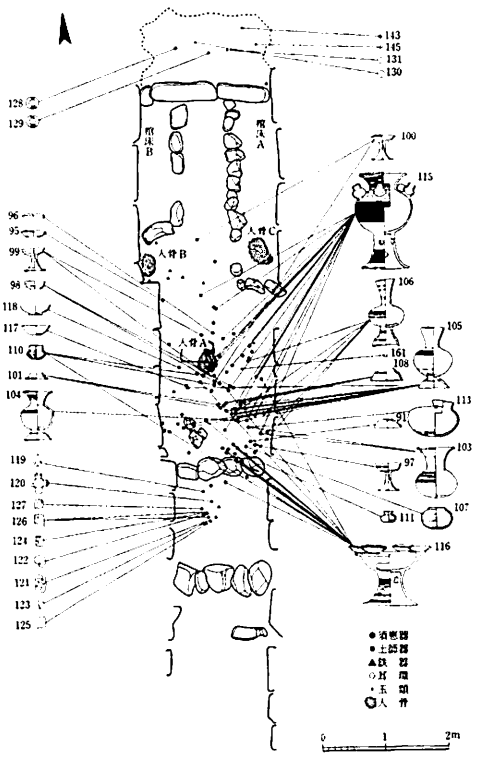

図15　上三谷2号墳石室内遺物出土状況図（谷若編1988より）

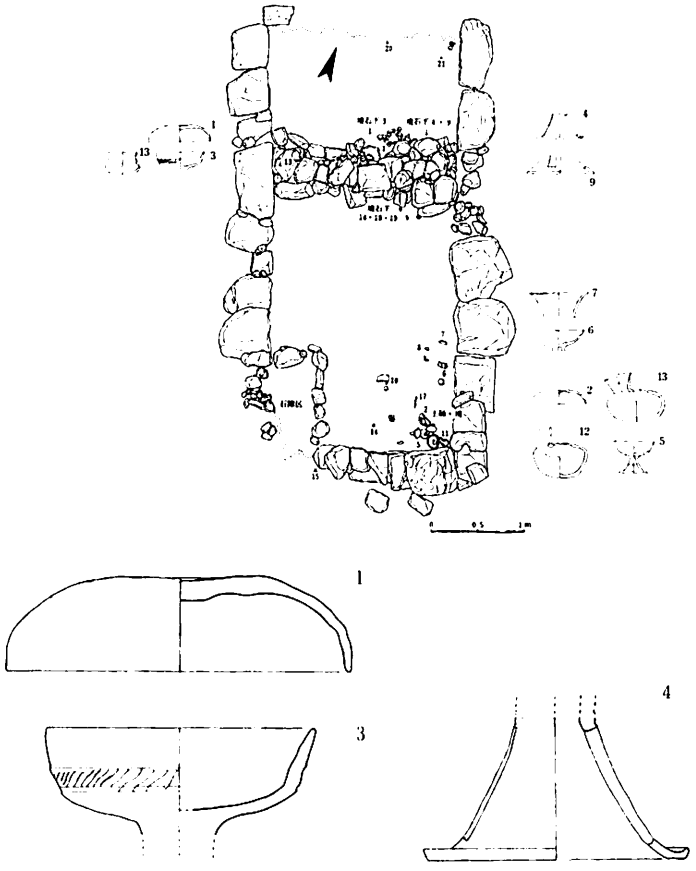

図16　上三谷3号墳石室内遺物出土状況図及び最古相の須恵器（谷若編1987より一部改変）

番古く、TK43型式並行を築造時期と捉える。そして、TK209型式・TK217型式並行の須恵器が追葬に伴うと考えられる。また、周溝東側の1号土坑からは、蓋坏・高坏・長頸壺・壺・大甕が出土しており、一括性が高く、その時期はTK209型式並行と考えられる。埋葬回数は、玄室内境石の設置が築造後に行われていることから、2回以上の埋葬を想定できる。

④猿ヶ谷2号墳

玄室及び羨道にて多くの遺物が出土している。玄室内では形を留める須恵器が多く、羨道では破片資料が多いことから、玄室内の出土遺物は最終埋葬時の様子をかなり留めていると考えることができる。須恵器及び大刀・馬具を中心に出土位置を検討する。

玄室奥壁より手前約1mの範囲には敷石があり、この範囲から多くの遺物が確認されている。奥壁東側では大刀5点と轡1組・鉄鏃・鉄鎌・指輪が集積されて出土し、その南側に刀子・耳環・丸玉・有蓋高坏・坏蓋・坏身が形を留めて出土している。その反対側の西側では、奥壁側より短頸壺・大刀があり、その南側に大刀3点と坏身・坏蓋・高坏蓋・耳環・丸玉がある。その西の側壁寄りには、北から短頸壺・坏蓋・有蓋高坏が順にあり、有蓋高坏にはf字形鏡板付轡・坏蓋・無蓋高坏・鉄鏃が重なって出土している。また、その周辺では轡2組以上と辻金具・鉄鏃がある。このような状況から須恵器・馬具・大刀類は二次的に移動され、集積されていることが窺える。このまとまりの中央寄りでは、坏蓋・高坏蓋・高坏破片・耳環が点在している。また、玄室奥側の敷石より南側ではほぼ中央で高坏蓋、大刀2点、高坏・器台の破片が出土している。その東の側壁寄りでは、坏蓋・高坏蓋・高坏・器台の破片と大刀1点・耳環が出土している。この資料群の東の側壁付近では轡2点・鉄斧2点・革金具が重なって出土している。

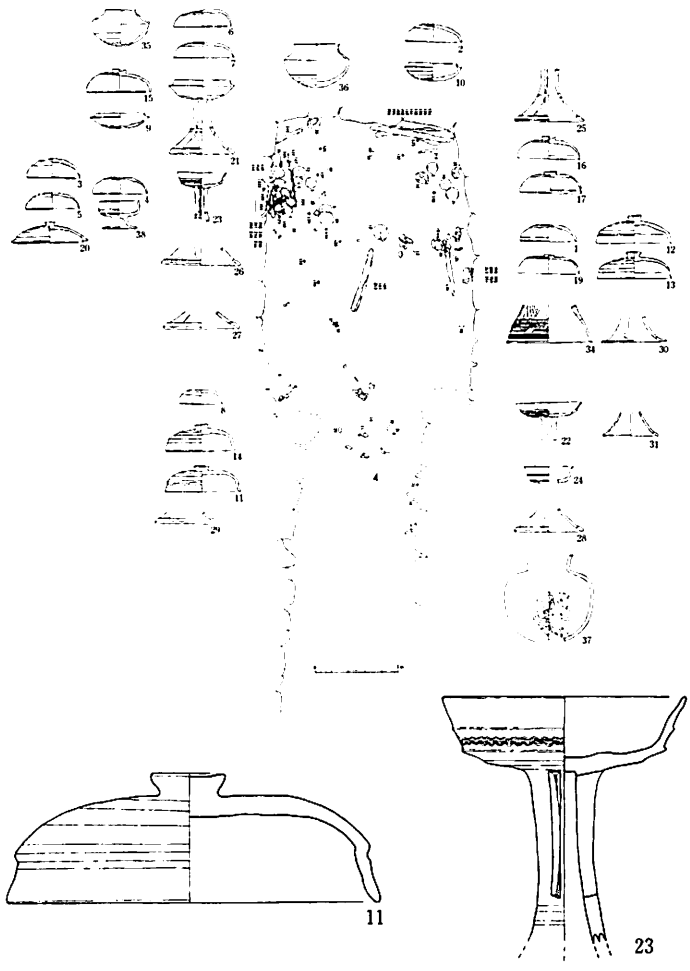

図17　猿ヶ谷2号墳石室内遺物出土状況図及び最古相の須恵器（多田・和田・岡本1998より一部改変）

玄門付近から羨道にかけては、坏蓋・高坏蓋・高坏坏部・高坏脚部・短頸壺の破片が点在している。

以上の玄室内の出土状況は先述の通り、最終埋葬時の様子を留めるが、遺物の二次的移動が認められる。須恵器の型式は高坏蓋（11～14）・無蓋高坏（23）が最古型式TK10型式並行で、有蓋高坏（21・25）がTK43型式並行、坏身（9・10）・坏蓋（1～7）・高坏蓋（15～19）がTK209型式並行、坏蓋（20）・無蓋高坏（38）がTK217型式並行と各型式の須恵器を一定量認めることが可

能で、須恵器を伴う追葬が随時行われていることがわかる。特に追葬段階で大刀[11]が副葬されていることは、この古墳の特徴の一つである。埋葬回数は、遺物の二次的移動が行われており、明確にできないが、耳環が14点出土しており、埋葬数の多さを指摘することができる。渡辺智恵美氏による耳環の調査及び分類に基づく[12]と①銀無垢技法（2点）、②銅芯銀板貼鍍金技法（8点）、③銅芯金板貼技法（3点）の製作技法を認めることができる。同一技法による製品が同時期に埋葬（装着）されていたと仮定すると、3回以上の埋葬を想定することが可能である。

表3　対象古墳出土耳環の製作技法

資　料　名	報告書番号	技　　法
猿ヶ谷2号墳－1	14図120	銅芯銀板貼鍍金
猿ヶ谷2号墳－2	14図121	銅芯金板貼
猿ヶ谷2号墳－3	14図122	銅芯金板貼
猿ヶ谷2号墳－4	14図123	銅芯銀板貼鍍金
猿ヶ谷2号墳－5	14図124	銅芯銀板貼鍍金
猿ヶ谷2号墳－6	14図125	銅芯銀板貼鍍金
猿ヶ谷2号墳－7	14図126	銅芯銀板貼鍍金
猿ヶ谷2号墳－8	14図127	銅芯銀板貼鍍金
猿ヶ谷2号墳－9	14図128	銅芯金板貼
猿ヶ谷2号墳－10	14図129	銅芯銀板貼鍍金
猿ヶ谷2号墳－11	14図130	銅芯銀板貼鍍金
猿ヶ谷2号墳－12	14図131	銀無垢(銀芯鍍金)
猿ヶ谷2号墳－13	14図132	銅芯銀板貼鍍金？
猿ヶ谷2号墳－14	14図133	銀無垢(銀芯鍍金)
上三谷1号墳－1	17図25	銅芯金板貼
上三谷1号墳－2	17図26	銅芯金板貼
上三谷1号墳－3	17図27	銅芯銀板貼
上三谷1号墳－4	17図28	銅無垢?
上三谷2号墳－1	38図128	銅芯金板貼
上三谷2号墳－2	38図129	銅芯金板貼
上三谷3号墳－1	9図20	銅芯銀板貼
上三谷3号墳－2	9図21	銅芯銀板貼鍍金？
上三谷4号墳－1	31図75	銅芯金板貼
上三谷原古墳－1	45図32	銀無垢(銀芯鍍金？)
上三谷原古墳－2	45図33	銀無垢(銀芯鍍金？)

⑤その他の古墳の築造時期

参考として4基以外の古墳の築造時期について簡単に触れておきたい。上三谷4号墳は、周溝南側出土高坏からTK43型式並行と捉える。上三谷5号墳は、埋葬時の石枕に伴う坏身・坏蓋からTK43型式並行と捉えることができる。上三谷原古墳は玄門西側出土の高坏からTK10型式並行と捉える。

(4) 古墳間の系譜について

前節にて検証した出土須恵器を基にした4基の首長墓の築造順序としては猿ヶ谷2号墳→上三谷3号墳→上三谷1号墳・上三谷2号墳が想定できる。この築造順序で古墳間の系譜（関連性）を確認することができるかを検討したい。なお、墳丘形態については、残存状況が悪く、比較が困難であるため、内部主体と副葬遺物について検討する。

①内部主体（石室形態）

4基の古墳はいずれも残存状態が悪いが、石室石材・石室の空間利用を基に検討する。石材では猿ヶ谷2号墳・上三谷3号墳で長さ50cm前後の塊石を基底石に用いている。上三谷2号墳では、長さ50cmから100cm前後の塊石を基底石に用いている。上三谷1号墳では、長さ100cm前後の大型石材を基底石に用いている。また、平面形態では4基とも両袖を有するが、玄室部分は猿ヶ谷2号墳でやや胴張りが認められるが、その他の3基には胴張りは認められない。以上の石室石材及び平面形態からは明確な関連性は認めることができない。

石室の空間利用で注目されるのは、奥壁より手前の部分に境石を設け、埋葬空間を設定している点である。この境石は、上三谷3号墳・同2号墳・同1号墳の3基で認めることができる。構築過程の検討により、上三谷3号墳では石室構築時ではなく、追葬時に塊石による境石を設置している。上三谷2号墳・同1号墳では、角材状の石材を構築時に設置している。また、3基ともこの境石より奥側で装身具などの副葬遺物が出土しており、埋葬空間として利用されていることがわかる。一方、猿ヶ谷2号墳では奥壁の手前約1mの範囲に敷石が施され、埋葬空間として意識されていることがわかるが、境石のような明確な区画は設置されていない。

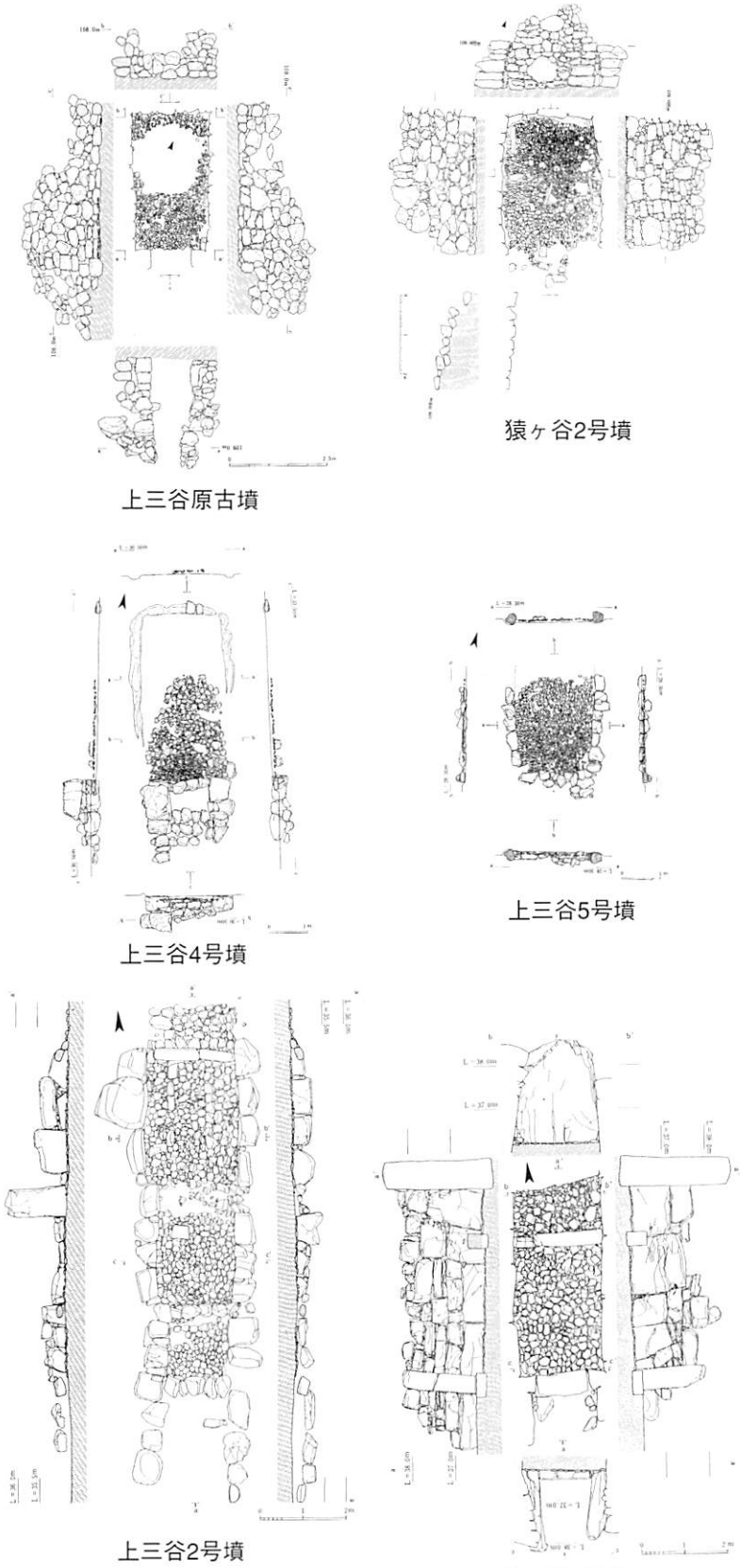

図18　対象古墳横穴式石室集成

以上の石室形態からは、境石に着目した場合、上三谷３号墳・同２号墳・同１号墳に関連性を認めることができる。また、石室用材の大型化を指標とすると上三谷３号墳→上三谷２号墳→上三谷１号墳という変遷を想定することができる。

②副葬遺物

副葬遺物の中の須恵器器種組成に着目し、古墳間の関連性を検討する。どの古墳も坏・高坏・壺類（長頸壺・短頸壺・広口壺など）・瓶類（平瓶・横瓶・瓶など）を基本とする組成である。しかし猿ヶ谷２号墳では高坏が22点と多く（高坏蓋を含む）、壺類が３点で、他の３基と比べ異なった組成となっている。特に壺類に注目して比較すると、短頸壺は４古墳で確認されているが、長頸壺・広口壺は、上三谷１号墳・同２号墳・同３号墳の３基で、脚付長頸壺・脚付広口壺は、上三谷１号墳・同２号墳の２基でそれぞれ確認されている。なお、それぞれの須恵器の型式や出土位置を詳細に検討する必要があるが、上三谷１号墳・同２号墳・同３号墳の３基では共通した須恵器の器種を用いた葬送儀礼が行われ、猿ヶ谷２号墳では３古墳とは異なる須恵器の器種を用いた葬送儀礼が行われていたことが想定できる。

このように、須恵器器種組成の比較からは、上三谷１号墳・同２号墳・同３号墳には関連性を指摘することができ、猿ヶ谷２号墳は３古墳と関連性が少ないといえる。

また、今回各古墳出土の須恵器を器種別に比較する作業を行った所、無蓋高坏で上三谷１号墳周溝出土資料と上三谷４号墳周溝出土資料の２点が、法量・器形・焼成状況が類似していることを確認した。[13] このことは、同一窯跡で同時に焼成された須恵器が異なる古墳での祭祀に用いられていることを示している。つまり、同時期に異なる古墳にて同じ須恵器を用いた祭祀行為が行われたことを想定することができる。更に、立地及び位置関係からも上三谷１・２号墳と上三谷

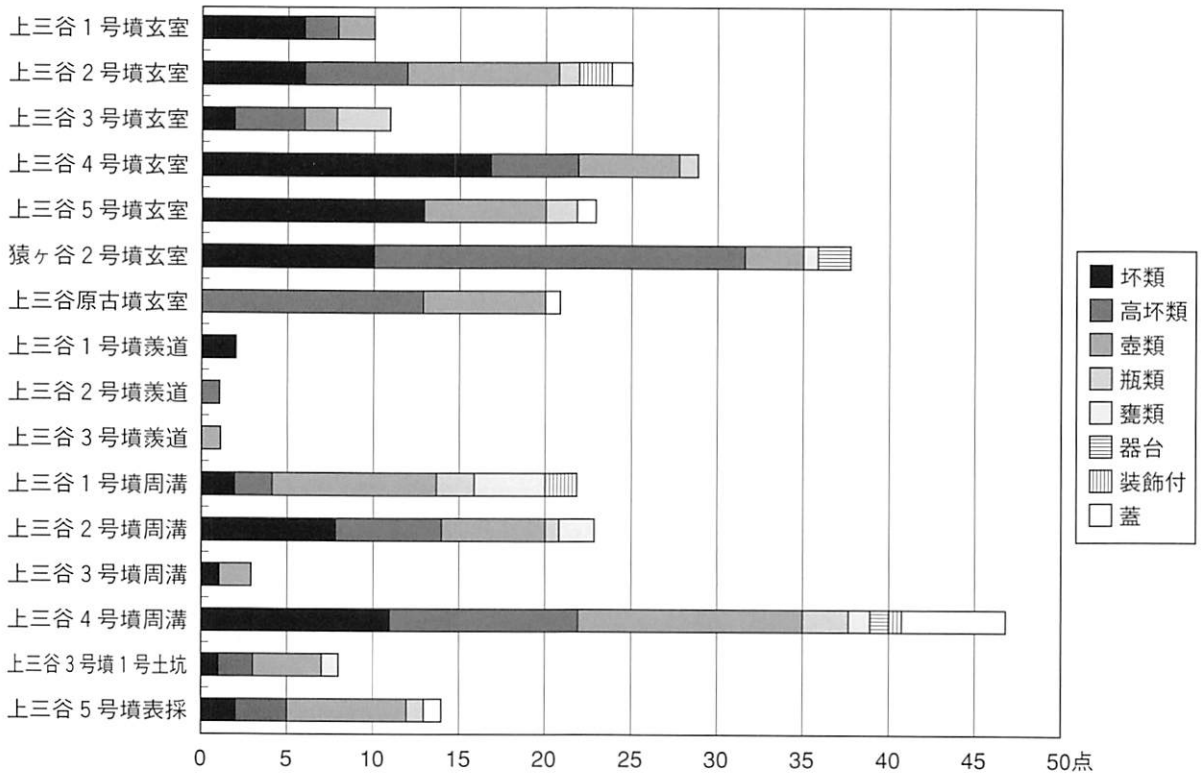

図19　副葬須恵器組成と出土量

表4　壺類の器種組成

	短頸壺	脚付短頸壺	長頸壺	脚付長頸壺	広口壺	脚付広口壺	脚付壺	直口壺	大型直口壺	小型直口壺	壺	合計
猿ヶ谷2号墳玄室	2										1	3
上三谷原古墳玄室					2						4	6
上三谷5号墳玄室	3	1			1						2	7
上三谷4号墳玄室	2		2			1		1				6
上三谷3号墳玄室					1		2					3
上三谷3号墳羨道								1				1
上三谷2号墳玄室	1			2	2	1				3		9
上三谷1号墳玄室	1		1									2
上三谷4号墳周溝	4		2	2		2			1		2	13
上三谷3号墳周溝	1						1					2
上三谷2号墳周溝			1				3				2	6
上三谷1号墳周溝			1	2	3	2					1	9
上三谷3号墳1号土坑			1								3	4
上三谷5号墳表採					2		2	2			1	7

3・4・5号墳は、同じ古墳祭祀を執り行う集団であると想定することができる。

③小結

以上の石室形態及び副葬須恵器を基にした比較からは、上三谷1号墳・同2号墳・同3号墳の3基の古墳では系譜関係を認めることが可能である。一方、猿ヶ谷2号墳は3基の古墳とは系譜関係を有さず、別系列の古墳であると考える。なお、首長墓ではないが、上三谷4号墳・同5号墳を含めて上三谷古墳群の築造順序を検討すると、5号墳→4号墳→3号墳→2号墳・1号墳を想定することができ、本古墳群では、継続的に古墳が造営されていることがわかる。

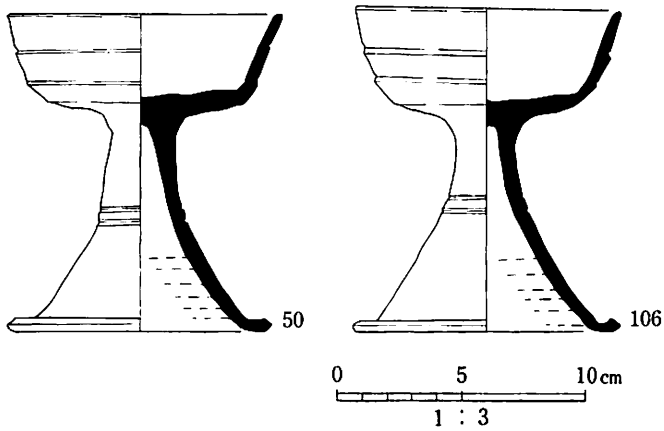

図20　上三谷1号墳・4号墳出土須恵器高坏

一方、猿ヶ谷2号墳の周辺には関連性を有する古墳は確認できないが、先述したとおり、本古墳の特徴は大刀類を数次に分けて追葬するという継続した埋葬が長期間にわたり行われていることである。それ故、上三谷古墳群と猿ヶ谷2号墳は造営集団の性格が異なる首長墓系譜ということができる。(14)

5　まとめ

以上のように今回検討した伊予市上三谷地域に所在する10基の古墳では、4基を首長墓と認めることが可能である。その首長墓系譜については、径約1kmと近接した範囲内にありながら、二系列の系譜が存在することを明確にした。最後にこの二系列の首長墓系譜が示すことと、古墳時代における当地域の位置づけについて考察し、まとめとしたい。

(1) 二系列の首長墓系譜

先ず、二系列の首長墓系譜の特徴をまとめると、猿ヶ谷2号墳はTK10型式並行期からTK217型式並行期まで長期間にわたり継続した埋葬が行われ、須恵器の型式差や耳環の製作技法などか

ら3回以上の埋葬が想定できる。そして、それぞれの埋葬に伴い、金銅装馬具や金銅装大刀などのまとまった遺物を副葬している。一方、上三谷3号墳・同2号墳・同1号墳ではそれぞれ数回の埋葬が認められるが、その埋葬は須恵器を中心とした遺物の副葬である。また、上三谷2号墳と同1号墳では築造当初からの埋葬計画を想定した石室の空間利用を窺うことができる。そして、その築造は、3号墳（TK43型式並行）→2号墳・1号墳（TK209型式並行）と順次行われている。更に首長墓ではないが、4号墳・5号墳が3号墳に先行して築造されている。このように、猿ヶ谷2号墳と上三谷古墳群の系譜は、世代毎に古墳を順次築造する集団（上三谷古墳群）と世代毎に古墳を築造せず、同一古墳へ埋葬を継続する集団（猿ヶ谷2号墳）という二つの異なる造墓原理を有した古墳造営集団であると整理することができる。

実年代	550	600		650		
古墳名/須恵器型式	TK10	TK43	TK209	TK217	TK46	TK48
猿ヶ谷2号墳	|← ① →| f字形鏡板付轡	|← ② →| 鐔付大刀−①	|← ③ →| 鐔付大刀−②	|← ④ →| 金銅装大刀		
上三谷1号墳			|← ① →| 鏡・圭頭大刀	|← ② ③ →| 鏡・圭頭大刀？	|←④→|	|←⑤→|
上三谷2号墳			|← ① ② →|	|←③ ④ →|		
上三谷3号墳		|← ① →|	|←②→|	|←③→|	|←④→|	
上三谷原号墳	|←①→| 素環鏡板付轡			|←②→|		
上三谷4号墳		|←①→|	|← ② →|	|←③→|		|←④→|
上三谷5号墳		|← ① →|	|← ② →|			

備考　下段は主な副葬遺物。網かけは埋葬が想定されるもの。網かけが無いのは、須恵器のみ出土が確認されるもの。

図21　対象古墳埋葬推定時期模式図

(2) 古墳時代前期・中期の松山平野南部

このような近接した地域に二つの首長墓系譜が存在することについて、当地域における古墳時代後期以前の様相を基に整理する。

古墳時代前期には、同じ上三谷地域に所在する嶺昌寺古墳（西田1986・遺跡発行会1998b）から三角縁獣文帯四神四獣鏡が2面分採集されているが、出土した古墳の詳細な情報は不明である。後続する古墳としては、伊予市宮ノ下に所在する吹上の森1号墳（相田1984・西田1986）があり、方格獣文鏡と筒形銅器・碧玉製紡錘車が出土しているが、墳形・主体部などについては不明である。古墳時代中期には、重信川の南約1kmの沖積低地にある松前町出作遺跡（谷若編1993）で、大規模な祭祀遺構が確認されるとともに、関連遺物の製作も行っていたことが推定されている。出作遺跡の南東約2kmの丘陵上に位置する伊予市猪の窪古墳（山本・長井1984）では、箱式石棺が検出され、棺内・棺外から武器・鉄製農工具・鍛冶工具が出土しており、鍛冶集団と関連のある被葬者像が推定されている。また、平野の南端に近い伊予市市場南組窯跡（長井1994・三吉2002）では、初期須恵器が確認されており、瀬戸内海沿岸にていち早く須恵器生産を行っていたことがわかっている。更に今回対象とした猿ヶ谷2号墳の封土からは約20点の伽耶系の陶質土器が出土しており、朝鮮半島から直接もたらされた可能性が高いとされている（三吉2002）。同じ

く上三谷原古墳の封土から3点の陶質土器が出土している（多田・和田1998・三吉2002）。このように松山平野南部は、その立地条件から古墳時代前期には畿内地域との関連が確認でき、中期にかけては須恵器生産や鉄器生産といった新しい文化の受容や朝鮮半島との関連が強くなり、松山平野における東西文化の受容拠点の一つとして位置付けることができる。

(3) 古墳時代後期における地域首長層の動向

先に記したような状況の下、古墳時代後期には、猿ヶ谷2号墳の初葬時に伴う金銅装馬具のように畿内との関連が再び確認することができる。そして、更に金銅装大刀類が数次にわたり副葬されている。このように猿ヶ谷2号墳の被葬者集団は、前代に築造された古墳のあった場所に新たに古墳を築造した[15]畿内との関連が深い集団であると想定することができる。

一方、上三谷3号墳では後の削平のため、石室内の遺存状況が悪く、このような遺物は確認されていない。しかし、その後、墳形を方墳に変えて、上三谷1号墳・同2号墳という継続した古墳を築造しており、安定した古墳造営集団であるといえる。なお、上三谷1号墳の第1被葬者に副葬されていた倣製四神四獣鏡[16]や圭頭大刀は、畿内から分与された可能性が高い遺物であり、猿ヶ谷2号墳の最終埋葬に伴う金銅装大刀などと同様の意味がある遺物である。このように7世紀前半という時期にこの二系列の首長墓では、一方で前代からの古墳へ埋葬を行い、一方で一辺30m前後の方墳を築造していることが明確になった。このことは、古墳築造契機となった被葬者を首長と考えると、一世代一首長ではなく、一世代に複数の首長の存在を想定させるものであり、地域における政治集団の実像は非常に複雑な人間集団によるものであると推察する[17]。

以上のように本稿では一地域における首長墓群の分析をとおして、後期における首長墓系譜の実態を検討した。その結果、非常に小範囲でありながら、複数の首長墓系譜が存在し、当地域における首長層の複雑な動向の一端が明確になった。今後は、より広域な地域での首長墓系譜の比較を行うとともに、一地域・一古墳における詳細な分析・検討も合わせて行うこととしたい。また、発掘調査が行われていない前方後円墳との関連や前方後円墳から方墳への変化などについて、論じきれなかった点は今後の課題としたい。

謝辞　本稿を作成するにあたり、上三谷古墳群の調査担当者である谷若倫郎氏には調査時の状況などについて御教示を得ました。また、下記の機関及び個人の方々に資料の確認・文献収集などでお世話になりました。文末ではありますが、記して深謝いたします。

伊予市教育委員会　愛媛県教育委員会　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター　（財）元興寺文化財研究所　松山市考古館

梅木謙一　岡田敏彦　小林一郎　多田仁　田中敬文　名本二六雄　山之内志郎　渡辺智恵美（敬称略・五十音順）

【註】

(1) 愛媛県における前方後円墳の基数については、研究者の認定方法の違いによりその数が異なっている（冨田2000)。松山平野では、長井・岡田1991で９基が掲載されている。

(2) 森1982、長井・森1992において水系毎の古墳の把握が行われている。

(3) 後期の前方後円墳が松山平野に集中する要因は、現状では明確な説明は行われていない。しかし、７世紀代の初期地方官衙とされる久米高畑遺跡群の存在や同時期の寺院に多く見られる法隆寺式軒丸瓦・軒平瓦の分布からは、前代の古墳時代後期に畿内地域との関連により前方後円墳が集中して造営されたことが想定できる。

(4) 報告書ではくびれ部の検出ができていないことから、径約20mの円墳とされているが、墳丘測量図から判断する限り、前方後円墳として問題ないと考える。

(5) 発掘調査では前方部は確認されておらず、円墳の可能性は否定できない。報告者が指摘しているように、周溝が全周せず、検出されている周溝をくびれ部の一部と判断し、前方後円墳として扱うこととしたい。

(6) この平均値は遺跡発行会作成の「愛媛県横穴式石室一覧表」（遺跡発行会1998a）に掲載されている松山平野の横穴式石室の中で玄室長が記載されているもの127基を対象とした平均値である。

(7) 古墳時代後期の階層についての近年の研究成果（大谷2001他）では、副葬遺物を基に各地域毎に階層構造が検討されている。当地域では、階層構造を復元するには至っていないが、装飾付大刀、金銅装馬具、鏡の他に装飾付須恵器が首長墓の卓越性を示す副葬遺物と考える。

(8) 須恵器編年は陶邑編年（田辺1981）を援用し、実年代については白石太一郎氏（白石1982）の「田辺・中村編年の第Ⅱ期と第Ⅲ期の境が七世紀の第２四半期の終わり頃、第Ⅲ期の最終段階が六七〇年からそれほど降らない時期」という見解に依拠し各型式との対応は図21に示す。

(9) なお、出土した須恵器を基に時期比定を行うにあたっては、土生田1998の検討作業を参照して、次の作業を行った。報告書の出土状況の記載を基に、①埋葬当時の様子をとどめているか、②二次的移動を受けているか、③追葬が確認されるか、④どの埋葬に伴うものかを検討し、石室形態やその他の出土遺物の年代観と相違がないかを検討した。

(10) この圭頭大刀は十窓鐔を有し、八窓鐔のⅣ式とは厳密には同じではない。しかし、年代的には大きな時期差はあまり無いと考える。

(11) 本古墳出土大刀には鐔を有するもの、鐔がないもの、金銅装を施すものがあり、4箇所から分かれて出土している。その中には数本が重なって出土しているものがあるが、古相を示すものと新相を示すものが伴出しており、追葬時に二次的な移動を受けていると思われる。

(12) この調査成果は渡辺氏を中心とする「松山平野における耳環の様相」に関する調査によるもの（渡辺他2002）で、渡辺氏より当館保管資料である対象古墳出土資料の製作技法の分類についてご教示を得た。なお、調査成果については未発表であるが、渡辺氏のご厚意により紹介させていただいた。

(13) ２点の須恵器の法量及び器形の特徴等は以下の通りである。上三谷１号墳周溝出土資料（50）は、口径11.0cm、器高12.6cm、脚部径10.6cmで坏部に２条の鋭い稜線を有し、脚部中央に２条の凹線が巡る。色調は淡褐灰色である。上三谷４号墳周溝出土資料（106）は口径10.6cm、器高13.0cm、脚部径10.8cmで、同様に坏部に２条の稜線を有し、脚部中央に２条の凹線が巡る。色調は褐灰色を呈する。なお、脚部の凹線の位置が若干異なるが脚端部の形状などはほぼ同じである。

(14) 猿ヶ谷２号墳における追葬時の遺物を重視しなければ、猿ヶ谷２号墳→上三谷３号墳→上三谷１号墳・２号墳という一系列の首長墓系譜を想定することも可能であるが、追葬時の厚葬を重視し、猿ヶ谷２号墳において一つの首長墓系譜を認めることとしたい。

(15) これらの陶質土器の出土状況は報告書では明らかではないが、封土内出土であることから、同一地点にあった古墳の上に、新たに後期古墳が築造されたという想定が可能であると考える。

(16) 森下章司氏の倣製鏡の分類では、この鏡は交互式神獣鏡系に分類され、倣製鏡の最後の姿の一つで

あると評価されている（森下1991）。

(17)関東地方では７世紀前半における方墳の被葬者像は、国造クラスの地域首長が想定されている（白石1996）。当地域の首長墓が伊余国造の国造クラスの墳墓である可能性は十分あるが、松原氏が指摘している（松原1988）ような文献史学の研究成果との整合性については今後の課題としたい。

【引用・参考文献】

遺跡発行会　1998a「愛媛県横穴式石室一覧表」『遺跡』第36号

遺跡発行会　1998b「城山古墳測量調査報告」『遺跡』第36号

大谷宏治　2001「階層構造論」『第８回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』第８回東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会

岡田敏彦　2000「愛媛県における首長墳系列の継続と断絶」『中国・四国前方後円墳研究会第６回研究会資料集』中国・四国前方後円墳研究会

岡田敏彦　2001「愛媛県における首長墳素描」『紀要愛媛』第２号　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1987「永塚古墳」『松山市文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会

栗田茂敏　1991『北谷王神ノ木古墳塚本古墳』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

栗田茂敏　1995「葉佐池古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田茂敏　1997『桧山峠７号墳』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田茂敏　1998「葉佐池古墳２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野史知　1997「経石山古墳－2次調査地－」『桑原地区の遺跡Ⅲ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

白石太一郎　1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集（白石太一郎2000「畿内における古墳の終末」『古墳と古墳群の研究』塙書房所収）

白石太一郎　1996「駄ノ塚古墳の提起する問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集（白石太一郎2000「東国における古墳の終末」『古墳と古墳群の研究』塙書房所収）

相田則美　1970「客池古墳調査における覚書」『遺跡』第６号　遺跡発行会

相田則美　1980「４・５世紀伊予の首長墓」『「社会科」学研究』第１号　「社会科」学研究会

相田則美　1984「愛媛県伊予市吹上の森１号墳の出土遺物」『「社会科」学研究』第８号　「社会科」学研究会

瀧瀬芳之　1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

瀧瀬芳之　1986「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』№266

田城武志・大森一成　1992「経石山古墳」『桑原地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

多田仁・和田賢・岡本芳明　1998「猿ヶ谷２号墳」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅡ－伊予市編Ⅱ－』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

多田仁・和田賢　1998「上三谷原古墳」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅡ－伊予市編Ⅱ－』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

谷若倫郎編　1987『上三谷古墳群』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

谷若倫郎編　1988『上三谷古墳群Ⅱ』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

谷若倫郎編　1993『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会

中国・四国前方後円墳研究会　2001『中国・四国前方後円墳研究会第７回研究会資料集』

都出比呂志　1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇第22号

都出比呂志　1999「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』
冨田尚夫　2000「愛媛県における前方後円墳」『前方後円墳を考える』古代學協会四国支部第14回大会研究発表要旨集
冨田尚夫　2003「資料紹介　松山市波賀部神社古墳出土須恵器について」『研究紀要』第８号　愛媛県歴史文化博物館
長井数秋　1986「猪の窪古墳」『愛媛県史　資料編考古』
長井数秋　1994「伊豫市市場南組窯跡出土の須恵器」『ソーシアル・リサーチ』第20号　ソーシアル・リサーチ研究会
長井数秋・岡田敏彦　1991「伊予」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社
長井数秋・森光晴　1972『三島神社古墳』松山市教育委員会
長井数秋・森光晴　1992「第四章古墳の発生」『松山市史』第１巻
名本二六雄　2000「川上神社古墳調査報告」『遺跡』第37号　遺跡発行会
西田栄　1986「吹上の森１・２号墳」「広田神社上古墳」「川上神社古墳」『愛媛県史　資料編考古』
野口晃・岡野保　1986「川上神社古墳発見の契機と遺物及び石室実測調査報告」『愛媛考古学』第９号　愛媛考古学協会
土生田純之　1998「古墳の築造年代算定をめぐって－松山市東山鳶が森２号墳を中心として－」『網干善教先生古稀記念考古学論集』（土生田純之1998『黄泉国の成立』学生社所収）
二つ塚古墳調査会・愛媛大学歴史学研究会　1984「松山市二つ塚古墳調査報告」『遺跡』第25号　遺跡発行会
松木武彦　2000「古墳時代首長系譜論の再検討－西日本を対象に－」『考古学研究』第47巻第１号　考古学研究会
松原弘宣　1988「伊予国の地方豪族」『古代の地方豪族』吉川弘文館
松山市史料集編集委員会　1987「永塚古墳」「白山神社古墳」『松山市史料集』第２巻
三吉秀充　2002「伊予出土の陶質土器と市場南組窯系須恵器をめぐって」『第２回愛媛大学考古学研究室公開シンポジウム　陶質土器の受容と初期須恵器の生産』愛媛大学考古学研究室
森光晴　1982「第4章　古墳文化の発達と社会の充実」『愛媛県史　原始・古代Ⅰ』
森光晴　1986「経石山古墳」「二ツ塚古墳」「波賀部神社古墳」『愛媛県史　資料編考古』
森下章司　1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第６号　史学研究会
山内英樹　2001a「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（２）」『紀要愛媛』第２号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
山内英樹　2001b「伊予における後期首長墳の動向」『中国・四国前方後円墳研究会第７回研究会資料集』中国・四国前方後円墳研究会
山本雅夫・長井数秋　1984「伊豫市猪の窪古墳発掘調査報告書」『愛媛考古学』第７号　愛媛考古学協会
吉岡和哉　2001『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
渡辺智恵美　1997「耳環小考」『元興寺文化財研究所創立三十周年記念誌』
渡辺智恵美・菅井裕子・梅木謙一・平尾良光・榎本淳子　2002「松山平野における耳環の様相」『日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会